

シューメイカーの性質の形而上学と

心的因果の問題

金杉武司
高千穂大学

心の哲学の大きな問題の一つに、以下のような「心的因果の問題」がある。まず、日常的には、心的状態は志向的内容やクオリアなどの心的性質のゆえに身体運動を引き起こすと考えられる。しかし他方では、身体運動を含むすべての物理的結果には、それを引き起こすのに十分な因果的効力を発揮した何らかの物理的性質があると考えられる。それゆえ、日常的直観に反して、心的性質が身体運動の生起において因果的効力を発揮する余地はないことになってしまうように思われるのである。これに対して、いかにすれば心的性質の因果的効力を説明できるか、という問題が「心的因果の問題」に他ならない。心的性質を物理的性質と同一視できるのならば、この問題は解消される。しかし、物理的性質による心的性質の多型実現可能性を認める限り、その選択肢はない。この多型実現可能性により、心的因果の問題は、物的一元論にとっても困難な問題として位置づけられる。

これに対して、近年、S・シューメイカーは、因果的力能が性質の本質であるとする「性質因果説」に基づき、被実現性質と実現性質の関係をそれぞれの因果的力能の束の部分全体関係として理解する「実現理論」によって、この問題の解決を試みている。この実現理論は、被実現性質と実現性質の関係を、「全くの同一性か全くの非同一性か」という二者択一ではなく、部分全体関係として理解する点でユニークであり、まさにそのゆえに問題を解決できるように思われる。

ところで、シューメイカーは、因果的力能を性質の本質と認めつつ、性質を因果的力能の束に還元することはできないと主張する。J・ハイルの議論によると、この非還元的性質因果説に基づく実現理論は結局のところトロープ説に帰着するように思われる。しかし、この議論が正しいとすると、問題が生じるように思われる。なぜなら、シューメイカー自身は、トロープ説では心的因果の問題を解決できないとして、トロープ説を退けているからである。果たして、シューメイカーの還元不可能性の主張は、自らの実現理論を窮地に追いやるような一歩になっているのだろうか。本発表では、トロープ説による心的因果の問題の解決可能性や、ハイルの議論の妥当性、シューメイカーの還元不可能性の主張の妥当性を検討することを通して、実現理論による心的因果の問題の解決可能性や実現理論のあるべき姿について考察する。